

■特別寄稿

# 日東団あり記

沼尾菊夫 (中44回)

## プロローグ

旧制飯田中学校には、正規の寄宿舎のほかに、生徒自治の自炊団体があつたが、その一つ「日東団」は、尚志社・同志社・自強社の名門勢力に押されて、知名度もやや低かつた。

資料によれば、日東団(正式名称「飯田日東学生団」)は明治三十七年七月に設立されたが、定まった住所とてなく、夜半に石油ランプ片手に、荷車を押しながら飯田の町を転々、ために「仏蘭西革命か日東団の家越しか」と言われながらも、辛うじて団の灯を守り通したとある。

こうした窮状を見兼ねた、団の先輩で名物教師の名も高い寛サ(北原寛・中9回)の奔走があつて、大正十一年九月に、学校にほど近い上郷村別府で蚕飼育の廃屋を購入、修繕して、ようよう終の住処が誕生したが、これ



も昭和二十年の初め、老朽のため閉鎖されて、ついにその歴史を閉じたのである。

この間四十年余に亘つて、多くの飯中生がここに在籍、起居して、共に泣き俱に笑いながら、お互に切磋琢磨して勉学に、スポーツにと青春を謳歌したが、それも今や歴史の彼方に埋没しようとしている。

その昔、日東団で育てられて人となつた

●めまお・きくお  
大正15年9月9日生れ。秦草村出身。旧姓・金田。飯田中学4年で予科練へ。人間魚雷「回天」乗組訓練を大分・大神基地で受け、出撃直前に敗戦。宇都宮在住。歌人の金田千鶴の甥に当たるも、歌才は？。ベレー帽の下は毛髪喪失。



日東団自炊部

私としては、記憶力消去の前に、当時の日東団内歴史の一端を記録し残すことが、せめてもの恩返しであり、鎮魂歌レクイエムとなるものと信じて筆を進める。

昭和十五年四月、五人の新入生がその日東団で、中学校生活の第一歩を踏み出した。下條村二人、平谷村一人、そして泰草村出身者二人のうちの一人が私だった。

### スタートは自治と自炊（団の興亡）

さて、その日東団だが、そもそもは寄宿舎や市井の下宿屋の欠陥を補い、学生らしい自治協同の精神涵養を目的とした自炊団体として創設された。従って、団員は自炊部に宿泊して、「謂ふことをやめよ、他郷辛苦多し」と。君は川流を汲め、吾は薪を拾はむ」を標榜の自炊が原則。その自炊部を本部に広く団員を集めて、学校内で確固たる地位を占めるべく、立派な団則のもと、羽生先生作「日東学生団歌」で氣勢を挙げてきた。

その間、時には柔道の有段者を多数輩出、「柔道部の日東団か、日東団ありての柔道部か」と言わしめた絶頂期があったかと思うと、反対に、「たった一人団に取り残され、「日東学生団」の看板を抱きて自炊せり」という記録も残る衰退期を経るなど、幾多興亡の歴史を辿ったのである。

寛サの努力で建物が確立されてからの後半期は、賄婦を雇って食事、洗濯の世話をするようになったから、自炊部とは名ばかりの賄付きの寮であったが、生徒自治の伝統だけはちゃんと守られていた。

私たちが入った頃には、十数人の内団生のほか、山本村出身者などの外団生が多数いて、年に一度の総会には、カレーライスを食べながらのかくし芸披露などで、大いに盛り上がった。時には天竜川へ出掛けて水遊びをしたり、また一年生の夏休みには、駒場から富士見台まで夜間行軍するなど、一応順調な団体生活のスタートだった。

### 破れ障子に見る青春（日常生活）

ここに、昭和十六年当時の一枚の写真が残っている（次ページ下段）。「我ら日東健児の日常を記念に残しておくまいか」という趣旨で、朝の起床から夜の就寝までの一日の生活風景を、それぞれ役割割りを演出して撮影したものだ（布団の中で読書しているのが筆者）。

この写真でもお分かりのように、日東団の室内は、障子、襖も畳もボロボロの荒れ放題だった。というのも、若さゆえのエネルギーと溜ったストレスをもて余した男たちが、暇さえあればここで相撲をとり、柔道の乱取りをし、じゃれ合い、追っかけ回してモヤモヤを発散させ

たことの当然の帰結だった。

「紅顔の美少年」とは烏諍がましいが、お互いの汗にまみれたニキビだらけの赤ら顔を指して、そう笑い合った私たちだった。ニキビを青春のシンボルと言うならば、間違いなく、ここには私たちの青春があった。

現代の若者にも体験させたいような、喧嘩あり、競争ありの肌の触れ合う切磋琢磨の集団生活が、確かにあった証を残す一枚の写真を見ての感慨は、《つわもの共が夢の跡》。

### 好々爺の顔を見せた寛サ（狸親父）

日東団規約には、「総理二団全体ノ監督ヲ依頼ス」とあり、当時、教頭だった寛サが総理に就いていた。総理とは名前だけかと思ったら、視察に来ることになってみんな慌てた。何日も前から掃除をし、障子を貼り、見苦しい物は隠して準備した。

そして当日、緊張でコチコチの我々の前に現われた寛サは、暗に相違のニコニコ顔で、「何か困ったことはないかな」と優しいのだ。「遠慮せんでもいいニ」と言われて、つい気を許して一つ二つ要望を出すと、急に顔を引きしめて、「そりやダメだ」とニべもなかった。後から上級生に、「馬鹿だな、お前ら。寛サの猫撫声に騙されて



日東健児の日常生活（昭和16年）

後列左から、アタック姿（川上芳郎）、洗顔（佐々木顯）、登校（牧島恒）、起床係（佐々木篤）、前列左から、会計係（佐々木裕）、就寝前（金田菊夫）、ひげ剃り（小倉宗雄）、寛ぐ（林忠三）、食事（田中道）、お茶風景（永島實、梅澤光夫）、勉強（中島重威）



西川勇君の卒業記念として

ベラベラと……」と注意されたが、間もなく私たちも、寛サの怖さが分かって来た。

何しろテキは、長年中学の博物、地理の教師として著積した情報を基に、生徒一人ひとりに目を光らせて、校則違反は絶対に許さない。また、「お前のその服装は何だ！」と人前も構わず怒鳴りつける。身体に似合わぬ大声で、カツとなると、すぐビンタが飛ぶから始末が悪かった。それも派手な往復ビンタだ。

それかと思うと、機嫌の良い時は、「オイ、一寸」と呼

軍靴が伝統を消した（戦争末期）

写真で見ると、我々の時代の制服は、夏・冬服とも、白いカラーの詰め襟と決まっていたが、普段の日の下駄履きはまだ許されていた。そこで一部には、弊衣破帽、腰手拭姿で、高下駄をカラン、コロンさせながら闊歩する、所謂蛮カラ気取りの猛者もいて、それなりの矜持も残されていた。

しかし、太平洋戦争激化、国民生活逼迫の皺寄せは、最初に中等教育に襲いかかった。昭和十八年に、飯中生の服装が国民服に戦闘帽、足に巻脚絆という情けない姿に変えられた頃から、教育制度も変化し始めた。

主要教科の削減に連動して、武道や教練の時間が増えた。上級学生の工場動員や、中学45期生の繰上卒業も決まった。また、予科練志願を生徒に強要する等、軍の下請けも学校の仕事になった。かくて軍靴が足音高く侵入するに及んで、先輩たちが管々と築いて来た伝統行事は中止の已むなきに至り、併せて生徒の学習意欲も急速に萎えていくのだった。

び止めて、肩を抱かんに、お父さん元氣かな、郵便局長の仕事大変ずら。よろしく言っとくんナ」という調子で懐柔にかかる。寛サはやっぱり狸親父だった。

こうした変化は、逸早く日東団に及び、団員たちは、先行きはどうなるだろうと、額を寄せ合ってはヒソヒソ。空襲があるから夜は灯火管制、黒い布で覆った電灯の下

では、参考書を開くのも億劫で、将棋ばかりやっていた。進学を諦めるなど、あの戦争は、多くの少年の夢を奪い、運命を変えた。

## エピソード

日本が長い忌わしい戦争に敗れて、新しい時代が始まろうという昭和二十年の春に、わが日東団は閉鎖されて、四十一年に及ぶ歴史の幕を閉じた。

その時、私は既に学校の肩叩きに応じて、予科練を志願、海軍にいたから、その最後を見届けることはできなかった。同じ泰阜村から入団、寝食を共にし、良きライバルでもあった牧島恒も、その前に工場動員中地震で死亡していた。

運命の神は、時にひどい悪戯をする。長男のため予科練狩りを逃れた牧島が死んで、人間魚雷回天で一〇



飯田中学時代

〇%死ぬ定め  
の私が生還する  
皮肉を演出したのだから  
……。  
何時かは訪  
れなければ、

と心に掛けていたが、十五年ほど前、帰郷のついでに遂に日東団の跡地に立つことができた。何処までも田んぼの続く純農村地帯は、五十年の歳月を経て一変、瀟洒な住宅も建つ飯田市のベッド・タウンと化していた。道路も森も、そして家も変った中で、前を流れる清流と、爾々と吹き抜ける風の音だけが往年を偲ばせた。

見当をつけた家のドアを叩いて、「昔、この辺に日東団という飯田中学の……」と言いかけると、ご主人が「アアここですよ、日東団があったのは……」。そう、あの辺りが玄関の筈ですが……と話が早い。招せられるままに上り込んで、いろいろ話をお伺いした。

私より幾つか年配のご夫妻は、やはり大家さんで、父親が北原先生に頼まれて、千三百円で蚕室を譲った昔話や、戦争が終わって十年ぐらいしてから建物を毀した経緯を話し、懐しんでくれた。

その好意的な雰囲気には甘えた私は、「若しお許し頂けるなら、お庭の片隅に、『ここに日東団ありき』の小さな標札を立てさせていただけませんか」と、口まだけ出かかった言葉を飲み込んだ。

日東団の碑は、そこに住んだ一人ひとりの心の中にひっそり建つのが似合う、と思いつつからである。

(注・日東団はその後復活し、昭和三十二年に廃止)